



## 文学部・人文学研究科の新たな試み:人文学推進インスティテュート

文学部長・人文学研究科長 長坂 一郎

新型コロナウイルスの感染が広がってから2度目の春を迎えています。ご存知の通り、世界的な流行の終息にはまだ時間がかかりそうな状況です。こうした中、本年度は4月に新入生と令和2年度入学生(新2回生)を対象とした入学式を執り行いました。特に、新2回生の入学式には予想を上回る9割ほどの学生が出席し、学生のみなさんがいかに対面で集まる機会を待ち望んでいたのかがわかりました。普段通りのキャンパスを1日も早く取り戻す必要性を強く感じた次第です。こうした想いを受け、当初は「対面で行える授業はできるだけ対面で」という方針で臨みましたが、程なく緊急事態宣言が出され、「オンラインで行えるものはできるだけオンラインで」という方針に残念ながら切り替わっています。教職員一同、学生のみなさん一人一人の学習・生活をできるだけ通常のものに近づける努力をしていますが、至らない点多々あるかと存じます。このことについては、率直にお詫び申し上げます。

新型コロナウイルスの嵐が過ぎ去るのを首をすくめて待っているだけでは仕方ありません。文学部・人文学研究科では、こうした時こそ新たな試みを進めようと、「人文学推進インスティテュート」をこの4月に新設しました。本インスティテュートは、研究科内の各センターが進めている教育・研究・社会連携を推進し、国内外の大学や大学共同研究機関、自治体や地域社会等との協力関係を推進する異分野共創プラットフォームとして機能させることを目的としたものです。このプラットフォームを基盤として、人文学の現代的諸課題の解明に資する新たなプロジェクトを育成、発展させ、成果を社会に還元していきます。

具体的には、(1)地域連携センターを中心として異分野共創型の大学の地域連携の全国的なモデルを形成し、(2)倫理創成プロジェクトによって文理横断的・異分野共創的な知を備えた人材の育成を目指します。また、(3)海港都市研究センター、日本語

日本文化教育プログラムにより海外協定校との共同教育研究プログラムを開発し、(4)神戸オックスフォード日本学プログラム(KOJSP)により、留学生のユニット型受入を進めるとともに、オックスフォード大をはじめとした海外の大学との学術交流を加速させます。こうした取り組みを続けることにより、神戸大学における「知と人を作る異分野共創研究教育グローバル拠点」の形成に貢献していく所存です。

人文学という学問においては、一人静かに古典と向き合う孤独な時間が大切なことは言うまでもありません。しかし、この感染症の流行により、人と人が顔を付き合わせ、疑問をぶつけ合い、一人では到達できない学問の深みへと他者と共に向かっていくこともまた人文学に欠かせない営みだということを改めて認識した一年でした。文学部は、上記のような新たな試みを通して、「コロナ後」の人文学のあり方を問い直そうとしています。このような試みを支えるために、今年度の9月まで「神戸大学文学部・大学院 人文学研究科創立70周年記念事業募金」を継続しています。これまで、多くの方々から御寄付をいただきありがとうございました。今後、文学部の教育・研究を支援するために、大切に使用させていただきます。また、神戸大学は2022年に120周年を迎えるため、「神戸大学創立120周年記念募金」も昨年度から始められました。引き続き、御支援、御協力のほどよろしくお願いいたします。

### CONTENTS

研究科長 挨拶	1
研究最前線	2~3
最近の著作から	4~6
イベント	6
報告	7
近況/編集後記	8



## 好古と新興が同居する時代を読み解く

有澤知世 助教

専門は日本近世文学。特に江戸戯作。主な業績として、「京伝作品における異国意匠の取材源—京伝の交遊に注目して—」（『近世文藝』104、2017年6月）、「古画を模す—京伝の草双紙と元禄歌舞伎—」（『考証趣味の歴史 江戸東京からたどる』文学通信、2020年）などがある。

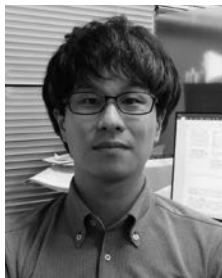
江戸戯作とは、18世紀半ばから19世紀初頭にかけて江戸でつくられた、新様式の散文の一群のこと。なかでも私が注目しているのは、江戸戯作の新たな表現を次々と切り拓いた、山東京伝（1761—1816）という人物です。彼は浮世絵師・デザイナー・店の経営者・研究者…とさまざまな顔を併せ持っており、それらの活動が有機的に作用しあっているため、領域横断的なアプローチを心掛けています。

最近、京伝の考証と戯作との関係について研究しています。知識人たちの間で好古ブームが起こっていた当時、自分が生きている時代よりもおよそ100年前の江戸の生活や文化に関心を抱いていた京伝は、古い資料を集めて研究し、『近世奇跡考』や『骨董集』という考証随筆を刊行しているのですが、随筆の中で緻密に考証された事柄が、戯作作品のなかでは形を変えて巧みに生かされています。彼の関心の在処が、同時代人たちの動向のなかでどの位置にあるのか、どのような資料をどうやって見て何を考えたのかを明らかにすることによって、近世後期の文化

の様相や知の在り方を解明することを目指しています。

ところで京伝は『近世奇跡考』の序文に、「昔のことは皆が大切にし、解明されていることも多いが、最近のことは気に留めず、口伝で残るものも嘘が入り混じっている。しかし今がいつか過去になった時、この時代のことを知りたいと思う人もいだろう」という意味のことを綴っています。正史には残り難しいさやかな人々の生活や芸能に関心を抱いていた京伝の考証は、特に絵画資料を根拠とすることに特徴があります。いつか過去になる〈現在〉も、記録があれば未来で蘇ることができると思うのでしょ。彼のこのような姿勢は、当時の知識人がどのように歴史を捉え、知を集積していたのかを考える手立てとなるでしょう。

前職では、アーティストと研究者の橋渡しを行う「古典インタプリタ」として活動していました。専門性を活かしながらさまざまな領域と対話することで、新たな気付きや発想を生み出すことができるような研究者を目指しています。



## 日本中世における地方寺院の経済構造

小野塚航一 助手

専門は日本中世の寺院経済史。主な業績として、「勝尾寺文書」と「類聚目録—未翻刻文書の位置をめぐって—」（『LINK【地域・大学・文化】』10、2018年）、「勝尾寺文書」所収寺領目録の基礎的研究」（『ヒストリア』280、2020年）など。

私の専門は日本の平安時代から戦国時代、いわゆる中世と呼ばれる時代の寺院経済史です。この時代、寺院は国家的法会などの宗教活動を担うことで、武家や公家といった権力者に比肩する力を持っていました。宗教活動を実現するための経済基盤として、寺院はいくつもの所領を経営し、そこでは宗教的言説を駆使しながら民衆を支配しました。例えば、寺院の所領で作られた生産物の納入は「神仏への奉仕」と評価され、その者には対価として「極楽往生」が約束される一方、未納者には「仏罰神罰」が宣告されたことが分かっています。ここにはたしかに、中世寺院の領主＝支配者としての姿が見えます。しかし、京都や奈良の大寺院はともかく、大規模な所領を持たない地方寺院をそのように捉えることは、はたして妥当でしょうか。彼らの有する独特の経済構造の解明を通じて、中世寺院の性格を見直していくことが研究課題です。

現在は大阪府箕面市に位置する古刹・勝尾寺を研究対象にしています。同寺の所蔵する「勝尾寺文書」は、数ある中世寺院文書のなかでも質・量ともに充実した希有な史料群です。

ところが、これまで十分な学術的調査は行われてきませんでした。大学院生時代に勝尾寺の門を叩いたことで始まった調査は、さまざまな方の協力を得ながら少しずつ前進しています。先の研究課題とあわせて生涯をかけて取り組んでいきたいと考えています。

さて、最後に職務にふれておきたいと思います。新型コロナウイルスの感染拡大によって社会の構造は大きく変化し始めました。大学では教職員をはじめ関係者たちが試行錯誤を重ねながらコロナ禍への対応を続けています。オンラインツールやLMSの本格的な導入によって教育や研究の可能性は大きく広がったものの、設備整備や質的向上には部局を中心とする組織的なバックアップがまだまだ必要な段階です。4月から教育研究活動支援を担当することになり、遠隔授業やWeb会議運営などのサポートに従事していますが、先生方と学生たちに少しでも良い環境を届けられるよう頑張っていきたいと思います。



## 近世在郷町の研究と自治体史編纂の取り組み

松本充弘 特命助教

専門は、日本近世の地域史。主な業績として、「近世後期の平野郷町における陣屋支配の基礎的考察」（『神戸大学史学年報』第32号、2017年）、「古河藩大坂詰家中と大塩事件」（『大塩研究』第84号、2021年）、「新版八尾市史 近世史料編1」（共著、2017年）、「新版八尾市史 近世史料編2」（共著、2020年）、など。

私は、大坂周辺地域の在郷町について研究しています。在郷町とは、「町方」と「在方」が分かれた日本の近世において、法的には「在方」と把握されながら都市的な景観を持った小都市を指す学術用語です。大坂周辺の摂津・河内・和泉の3か国には、1里ないし2里の間隔で在郷町が点在しているとされます。戦国期の城下町に由来する池田や伊丹、寺内町に端を発する富田林や貝塚などが、その代表例です。私が分析対象としている平野郷町は、摂津国住吉郡に属し、中世には堺と並び称された環濠自治都市に淵源を有しています。

既往の研究において、在郷町は綿作や酒造、絞油などの商品生産により元禄期（1688～1704年）に発展の頂点を迎えるものの、以降は大坂が全国市場として確立したことで経済的に停滞したとされてきました。このような研究潮流において、在郷町の自治的な運営体制の変遷や幕藩領主による支配の様相には、ほとんど関心が向けられませんでした。

平野郷町は、元禄7年（1694）に武蔵国川越藩の柳沢吉

保領となって以降、側用人や老中など、幕閣の要職を勤める関東の譜代大名によって支配されました。中でも、近世中後期の領主である下総国古河藩の土井家は、平野郷町に陣屋（飛地領に設けられた領主側の役宅）を開設し、上方の飛地領を管掌させています。「陣屋元」となった平野郷町を分析対象に据えることで、在郷町が果たした政治的機能を検証することが現在の目標です。

ところで、2020年9月から携わっている特命助教としての仕事では、兵庫県丹波篠山市における市史編纂を担当しています。市域に含まれる近世村の多くは、丹波国篠山藩領・同亀山藩領であり、幕藩領主の所領が分散・錯綜する大坂周辺地域にあっては稀有な特色と言えます。自治体や地域住民の方々の理解と協力を欠いては前進が望めない事業で、世界中を覆うパンデミックも相俟って一筋縄ではいかないものを感じていますが、どうにか道筋をつけていきたいと思っています。



## こころの痛みの可視化

柳澤邦昭 講師

専門は社会心理学、社会神経科学。主な業績として、『社会的認知—現状と展望—（唐沢かおり編）』（共著「神経科学と社会的認知」担当、ナカニシヤ出版、2020年）。

2020年10月に人文学研究科・文学部に着任しました。専門は社会心理学で、社会とこころの関係について研究を行っています。社会心理学では、人を社会的動物として考えます。人は社会関係の中で生きているため、他者とのつながりを築き、維持したいという欲求があります。特に、この欲求が満たされない状況では、こころの痛みが生じ、それが持続することで健康上のリスクまで高めてしまうことが知られています。したがって、私たちのこころは社会と不可分な関係にあり、社会的孤立や社会的排斥に対して極めて脆弱な側面を有していると考えられます。

上記の点に着目し、多くの社会心理学者は人が社会的排斥、つまり仲間はずれにされた際の心理状態について研究を進めています。私はその際の脳の働きに着目し、研究を進めています。通常の医療診断で用いられるMRI装置と同じものを研究で使用することで、仲間はずれにされた際にどのような脳の反応が生じるのか、客観的なエビデンスを得ることが可能です。同様の試みは既に海外の研究者も行っていますが、

仲間はずれにされることで、ある特定の脳領域の活動が高まることが私の研究でも確認されました。それは前部帯状回と島皮質と呼ばれる脳領域で、“痛み”の処理に深くかかわる脳領域です。まさしくこころの痛みと言えます。こうしたエビデンスに基づき、私たち研究者は社会的排斥や孤立の状況で生じる心的苦痛を社会的痛みと呼んでいます。

より最近では、仲間はずれを目撃した場合についても研究を進めています。たとえば、あなたの大切な人が仲間はずれにされている場合、あなたの脳ではどのような反応が生じているのでしょうか。母親を対象とした実験では、子供が仲間はずれにされている際、母親の脳では痛みの処理と類似した脳の活動パターンが生じることが確認されました。興味深いことは、こうした脳の活動パターンは母親自身が仲間はずれにされている場合よりも強いことです。引き続き、脳を介して社会とこころの関係に迫りたいと考えています。

## 芦津かおり 『股倉からみる『ハムレット』—シェイクスピアと日本人』 京都大学学術出版会 2020年8月

明治の西洋化政策をきっかけに日本人はシェイクスピア悲劇『ハムレット』と出会う。爾来、多くの近代作家(漱石、志賀、太宰など)が、それぞれの動機や解釈を胸にこの西洋の「名作」を書き換えてきた。本書は和製『ハムレット』翻案を九つ取り上げて、その翻案化プロセスや原作に対する批評性を明らかにしつつ、全体として日本的シェイクスピア受容の独自性をあぶり出すものである。『週刊読書人』や『図書新聞』などに好意的な書評が掲載された。(芦津かおり)



## Hideki Kishimoto. Analyzing Japanese Syntax: A Generative Perspective. 開拓社 2020年10月

英語で書かれた日本語統語論の教科書。言語学の中核的な統語理論である生成文法の哲学的背景から説明を始め、理論で使用される主要な概念をわかりやすく説明した上で、英語と比較しながら日本語に特徴的なさまざまな構文を生成文法理論でどのように分析できるかを解説する。各章末には、理論的な背景や日本語の統語論の論点についての簡略な補足解説がある。ネットで公開されている習熟度別の練習問題は、自学習や授業の教材として使用できる。(岸本秀樹)



## 宮下規久朗 『1時間でわかるカラヴァッジョ』 宝島社 2021年3月

私の専門とする17世紀イタリアの画家カラヴァッジョの生涯と芸術を平易に説明した新書。『カラヴァッジョへの旅』(角川選書)や『もっと知りたいカラヴァッジョ』(東京美術)などカラヴァッジョに関する以前の拙著と重なりますが、最近提出された新説を反映させ、新発見の作品も取り上げました。タイトルは出版社が付けたものですが、実際には1時間では読み終わらないし、1時間でカラヴァッジョをわかる必要ありません。(宮下規久朗)



## 宮下規久朗 『カラヴァッジョ原寸美術館 100% CARAVAGGIO!』 小学館 2021年3月

カラヴァッジョの代表作とその部分図を原寸で紹介する画集。滅多にイタリアに行けなくなった現在、少しでも本物を見る体験を提供しようと企画されたものです。彼の作品の大半は非常に大きいのですが、実作品を見たときの印象に近づけるべく、大きさとともに図版の色も努めて本物に近づけました。それぞれの作品解説のほか、カラヴァッジョ作品の現地での見え方についての論考「カラヴァッジョ作品と観者」を収録しました。(宮下規久朗)



## 宮下規久朗・佐藤優 『美術は宗教を超えるか』 PHP研究所 2021年5月

元外交官で『国家の罫』や『獄中記』などで知られる作家の佐藤優氏と、キリスト教と美術をめぐって対談したものを「言葉にできないもの」をどう言語化し、「目に見えないもの」をどう可視化するかという問題を中心に、イコンとイコノクラスム、ルネサンスと宗教改革、マリアの土着化など、私の美術史観をベースに、神学やロシア文化に通じた氏の該博な知識が補完する形で、広く美術と宗教について楽しく議論することができました。(宮下規久朗)



## 油井清光・白鳥義彦・梅村麦生編 『3STEPシリーズ1 社会学』 昭和三社 2020年8月

社会学研究室の教員および大学院出身者による、社会学を専門としない初学者を念頭に置いた教科書。相互行為、時間、ボランティア、紛争・物語・記憶、ファッション、生きづらさ、ジェンダーとセクシュアリティ、医療、サブカルチャー、観光、消費、移民、国際結婚と地域社会、組織、労働といった身近なテーマを入口に、基礎的な概説、ケーススタディ、アクティブラーニングのスリーステップで各章学べる。読み物としても面白いです。(白鳥義彦)



## デュルケム/デュルケム学派研究会著、中島道男・岡崎宏樹・小川伸彦・山田陽子編 『社会学の基本 デュルケムの論点』 学文社 2021年1月

私の前任者である大野道邦先生が中心となって2000年に立ち上げられたデュルケム/デュルケム学派研究会の20年間の活動ならびに同研究会を母体とする科研費の成果として刊行された、命題を出発点に社会学を学ぶガイドブック。デュルケムの命題のみならずデュルケム学派の人々、同時代の思想家や批判者、継承者、さらには現代の社会学者への影響まで、7部43章で立体的な案内がなされている。大野先生の遺稿も収録されている。(白鳥義彦)



## 橋本鉦市・阿曾沼明裕編著 『よくわかる高等教育論』 ミネルヴァ書房2021年4月

今日、大学・高等教育それ自体が研究や教育の対象となっている。本書では、入試、就職、カリキュラム、構成員、組織、制度、ガバナンス、歴史、国際比較、グローバル化、財務・経営、研究、社会との関係といった多面的な視点から、高等教育の諸相がコンパクトに論じられており、高等教育をめぐる諸問題や論点、歴史的な展開、国際比較による各国の特性を知ることができる。白鳥は「フランス専門学校主義」と「フランスの大学」を執筆している。(白鳥義彦)



## 高田京比子・三成美保・長志珠絵編著 『〈母〉を問う——母の比較文化史』 神戸大学出版会 2021年1月

古代から現代まで、日本・西洋・中国における多様な「母」の役割・機能・表象を考察した論文集。母子関係のジェンダー差に注目しつつ各時代・文化の母—息子関係を明らかにする第一部、国家・共同体などの公的世界と「母」の関係を問う第二部よりなる。高田が第1章「モデラータ・フォンテに見るルネサンス末期ヴェネツィアの母」を執筆した他、濱田が「よき息子、魯迅」、樋口が「日本中世文学における複数の『母』について」、名誉教授の森が「中国歴史正史から見る『母』の役割」のコラムを寄稿している。(高田京比子)



**松田素二編 『集合的創造性—コンヴィヴィアルな人間学のために』 世界思想社 2021年3月**

コンフリクトやカオス、不確実性や不条理がもはや「常態」となりつつある現代、新たな共同性とその創発的な能力の発現がこれまで以上に求められている。「集合的創造性」という概念を一つの軸として、多様な観点・フィールドから考察がなされている。佐々木（一番最後に入稿）は中米移民の移動実践を題材に、そこに現れつつある「まだ見ぬくわれわれ」の力動とその作用について論じた。（佐々木祐）



**松田素二他編 『日常実践の社会人間学—都市・抵抗・共同性』 山代印刷株式会社出版部 2021年3月**

今日の社会において生きるわれわれが、実践を通じていかに日常世界を再-構築し、またそれをいかに変革しているのか。都市/抵抗/共同性をそれぞれの切り口に、松田素二のもとで学んだ（り学んだりしなかった）論者が考察を行う。佐々木（学ばなかった方）は、80年代・ニカラグア革命における詩作運動の誕生と圧殺の過程について論じ、そこに今日的な「抵抗」の可能性を探った。（佐々木祐）



**田中雅一他編 『ジェンダー暴力の文化人類学：家族・国家・ディアスポラ社会』 昭和堂 2021年3月**

「ジェンダーは希望である。なぜならジェンダーは男らしさや女らしさが変革可能な属性であることを力強く指し示しているからだ」。にも関わらず/だからこそ、行為遂行的に行き使される多様なジェンダー暴力について、人類学的なフィールドワークを元に議論が行われる。佐々木（半分人類学）は、メキシコにおける中米移民女性たちの移動過程に深く刻み込まれた暴力と生き延びの諸局面を描写した。（佐々木祐）



**佐藤昇・木曾明子他(訳註・解説)、『デモステネス 弁論集 6(西洋古典叢書)』 京都大学学術出版会 2020年7月**

本書は、古代ギリシアの弁論家デモステネスの名の下に伝わる弁論作品を翻訳し、注釈・解説を施したもので、シリーズの第6分冊にあたる。前4世紀の都市国家アテナイで原告と被告が演説した法廷弁論のうち、とりわけ私訴弁論と呼ばれるジャンルを数多く収めている。暴行事件や身分詐称事件、相続問題など当時の社会的現実が鮮やかに描き出されている。収録18作品のうち佐藤は5作品の訳註・解説、その他の補註や解説などを担当した。（佐藤昇）



**ファン・コザンデ/ロベール・デシモン(フランス絶対主義研究会訳)『フランス絶対主義—歴史と史学史—』 岩波書店 2021年4月**

フランスの絶対主義は、本当に国家と社会を隅々まで支配する「絶対権力」だったのか。他国とは異質の、特殊フランスの事象だったのか。そして近代フランスは、それと完全に断絶しているのだろうか。多言語にわたる膨大な研究蓄積を消化して、絶対主義の理論と実践、さらには歴史観を総体的にとらえ直す刺激的な書物である。（小山啓子）



**Matsuda, T., Wolff, J., Yanagawa, T., *Risks and Regulation of New Technologies*, Springer, 2021年1月刊行**

ジョナサン・ウルフ・オクスフォード大学教授、柳川隆・経済学研究科教授と共同編集しました。神戸大学先端融合研究環の「メタ科学技術研究プロジェクト：方法・倫理・政策の総合的研究」の成果です。英国、ドイツ、中国の研究者の寄稿など15編の論文からなります。1)Socio-humane Sciences of New Technology, 2)Reproductive Technology and Life, 3)Environmental Technology, 4)Science and Societyの4部構成で生命と環境に関わる先端技術の方法、倫理、政治経済を論じています。（松田毅）



**松田毅、叢書メチエ『夢と虹の存在論—身体・時間・現実を生きる』 講談社 2021年4月刊行**

本書のコンセプトは、デカルトとライプニッツの「夢論証」から始め、虹の科学と存在論、身体、時間、現実の問題系を辿ることで、読者に自分の手で哲学を作るためのモデルを提供することです。特に第5章で現代に生きるわたしたちが遭遇する「現実の迷宮」を可能性と現実性の差異、現実世界の「唯一性」問題について論じています。（松田毅）



**Ulrich Weber, Andreas Mauz, Martin Stingelin (Hg.): *Dürrenmatt-Handbuch. Leben-Werk-Wirkung*, Metzler, 2020年12月**

20世紀スイスのドイツ語文学を代表する作家フリードリヒ・デュレンマット(1921-1990)の生誕100周年を記念して出版されたハンドブック。演出家、画家でもあった彼の芸術活動の全体像を描くべく、文学・絵画作品と主要なモチーフ、演劇論等の芸術理論、受容史を網羅的に取り上げている。増本は日本におけるデュレンマット受容の項を担当。執筆者65名のうち、ヨーロッパ圏外から招待されたのは私ひとりなのがちょっと自慢です。（増本浩子）



**葉柳和則編『ナチスと闘った劇場—精神的国土防衛とチューリヒ劇場の「伝説」』 春風社 2021年2月**

チューリヒ劇場はナチス時代に亡命演劇人を受け入れて、ドイツで焚書にされた作品の上演を続け、戦後は民主主義の象徴として伝説化された。本書はチューリヒ劇場における作品上演のプロセスを社会・文化的視点で分析するとともに、スイス人の（抵抗）の背景に潜むナチスへの（順応）にも目を向け、「ナチスと闘った劇場」という伝説の功罪を問う。増本はデュレンマットのチューリヒ劇場デビューの経緯を扱った第8章を担当。（増本浩子）



## 中尾芳治編 『難波宮と古代都城』 同成社 2020年6月

長年にわたり難波宮跡の調査・研究を主導してきた中尾芳治氏の難波宮発掘60周年を記念する論文集。難波宮をはじめ、古代難波地域・大阪湾岸をめぐる、また日本から東アジアにわたる都城制をめぐる考古学・古代史研究の研究成果74編を収録。古市「淡路宮とその原史料」は、反正天皇の淡路宮生誕伝承を取り上げ、その素材が反正に仕えた淡路の丹比集団の奉仕起源譚にあることを明らかにした。(古市晃)



## 木本好信編 『古代史論聚』 岩田書院 2020年8月

奈良平安時代政治史研究に多くの業績を挙げている木本好信氏の古希を記念する論文集。古墳時代から飛鳥・奈良・平安時代に及ぶ考古学・古代史研究の論文60編を収録。古市「ワナサとミマツヒコ—国家形成期における海人集団の動向—」は、出雲・播磨の風土記にみえるワナサヒコ、ミマツヒコと呼ばれる神話的人格の伝承を検討し、それらが5世紀にさかのぼる阿波の海人集団の日本海地域への移動を反映した伝承であることを述べた。(古市晃)



## 須田勉・荒井秀規編 『古代日本と渡来系移民—百済郡と高麗郡の成立—』 高志書院 2021年3月

古代の渡来人の2つの集住地、摂津国百済郡と武蔵国高麗郡の実態に迫ることをめざした論文集。両郡に関する考古学と文献史学の最新の研究成果17編を収録。古市「摂津国百済郡をめぐる諸問題」は、7世紀の百済滅亡に際して日本に亡命してきた百済王族たちが居住した摂津国百済郡について、発掘調査成果と文献史料の比較検討によりその実態を明らかにする。(古市晃)



## 小野寺淳・平井松午編 『国絵図読解事典』 創元社 2021年2月

神戸が属した摂津国のように、古代から続いた旧国を単位に描かれた「国絵図」は慶長9(1604)年以降、5～6度にわたり徳川政権による諸国の絵図元に対する調進命令の下に作成された。それらを集成して「日本総図」も作られた。古代に「国郡図」の記録もあるが、現物は残っておらず、国ごとに総攬する『国絵図の世界』(柏書房、2005)が国絵図研究会から出版されたのに続く本書は古代日本や中国との関係なども通覧された1冊である。(藤田裕嗣)



# EVENT

## イベント

### 神戸・北京・復旦三大学人文フォーラムについての報告

濱田 麻矢

2019年から始まった北京大学及び復旦大学からの三大学人文フォーラム。3回目の2020年は本来上海の復旦大学で集合する予定だったのですが、疫禍によってそれは叶わなくなりました。二年続けてやってきたようなマクロな視野での会議はオンラインには馴染まない、かといって専門的な学会会議を開くのも難しい。そこで視点を転じ、オンライン教育についての問題とその対処法、そして可能性について三校の経験を交換しようということになりました。会議の基本的な枠組みは復旦大学が作成し、プラットフォームは我々が使い慣れているzoomでお願いしました。

当日は例年は二日の会議を一日に縮小し、「オンライン教育におけるカノン」「押し寄せる困難と考えられる方策」「オンライン学術グループの成長」「クロスメディア時代の人文カリキュラム」という四つのセクションで二人ずつが報告、一人が司会をするという形で合計十二人、各校四人ずつ教員が参加しました。

オンラインでの簡略な打ち合わせのみで当日を迎えましたが、「オンライン時代に研究教育をどう進めるか」という切迫した課題は共通のものであり、充実したフォーラムになりました。教育面についてはどのようなプラットフォームを使うのか、資料はどう提示するか、またフィードバックはいかにして行うか、TAに何を依頼するかなどの授業運営についての工夫に加え、オンライン大学院入試の経験についてもレ

ポートがありました。研究面については、オンライン資料の検索の仕方、利用方法のほか、オンラインを使った書評サイトという新たな試みの報告もあり、大きなヒントを得ました。オンライン教育のインフラそのものが理系あるいは社系中心に進められており、人文系に見合う形は自分たちで模索せねばならないという課題は日中に共通するものでした。

今回は当番校の復旦では通訳は用意できないということで、神戸の院生複数で通訳チームを組みました。学生ホールに集合し、距離を保ちながら交代で仕事にあたったのもいい経験になったと思います。

今年度については例外的事項が多く、参加者は文学部及び中文系の教員に限り、テーマも必ずしも学術的ではないものとなりましたが、両校の神大への教員派遣の歴史と、ここ二年間のフォーラムで積み上げた信頼関係を確かに感じることができました。コアになるメンバーと、初めて参加するメンバーのバランスもよかったと思います。

疫禍が過ぎ去れば元の形(複数学部で学際的に参加し、学生にも報告の機会を与える)に戻すことになると思いますが、今回のコアメンバーを中心にさらに理想的なかたちを考えていく予定です。このフォーラム、2021年秋は北京大学で開催されることが決定しています。対面で再会するのが待ち遠しいです。

## 地歴科教育論

## ＜兵庫県立御影高校 GS 課題研究「GS 人文地理」地域探究発表会＞

伊藤 隆郎・菊地 真

神戸大学文学部では、授業科目「地歴科教育論」を兵庫県立御影高校総合人文コース2年生の「GS 人文地理」（GSはGlobal Studiesの略）と連動させ、高校生が地域をテーマとして班別に行う探究活動を大学生が支援するという授業を実施しています。その成果を高校生たちが披露する発表会が、去る6月29日午後に行われました。

本事業は、教員をめざす大学生が高校教員から直接指導を受けながら経験を重ね、教員としての資質・実践力を高めるだけでなく、大学生と大学教員が高校生の探究学習を支援するという、互いにメリットのある高大連携のモデルとして、2006年以来実績を重ねてきました（ウェブサイト：<http://www.lit.kobe-u.ac.jp/chirekika/index.html>）。

コロナ禍のせいで、昨年度は御影高校と連携した授業をまったくできませんでした。今年度はZoomを利用しオンラインで大学生が高校生に助言しました。接続時間が限られる上、画面越しでのやりとりとなるため、大学生も高校生もコミュニケーションをとるのに苦労していたものの、何とか従来に近い形で授業を実施することができました。

成果発表会は例年、神戸大学で行われており、当初は瀧川記念学術交流会館を会場にする予定でしたが、感染拡大防止を重視して、それもZoom ミーティングで行うことにしました。

8つの班に分かれた高校生たちがパワーポイントを使って

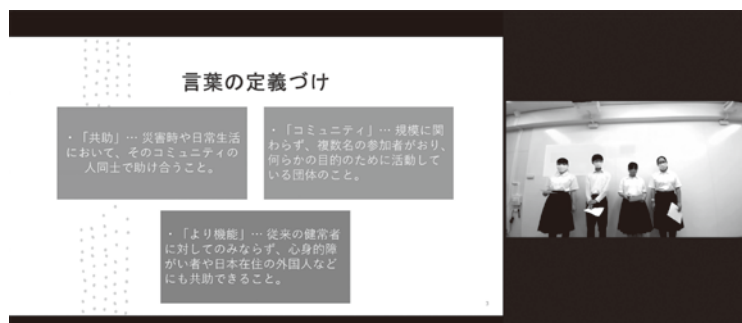
発表したテーマは次の通りです。「おさがりハイスクール～高校生から地域の子どもたちへ～」「ともに助け合えるコミュニティとは？～日ごろからできる対策と行動について～」「どう宣伝する？～若者の心のつかみ方～」「もったいない！～8分で巻き起こす食品ロス革命～」「知っとお？減災 やろうよ！減災」「御影高校生の部屋～中学生が悩まないために～」「Let's 家族とコミュニケーション！～日本版 HYGGE つくってみた～」「勉強ができない？読書ができない？よし、図書館へ行こう！」。いずれも甲乙つけがたい力作で、高校生の保護者や調査に協力してくださった方々なども多数参加して盛会のうちに終わりました。

このように、今年度は授業も成果発表会もオンラインになってしまいました。しかし、この授業のために大学生と教員が大学と高校を往復しなくてもよい、また発表会への参加が気軽にできるといったオンラインの利点もあるように思います。コロナ禍が収束して来年度には通常の授業ができるようになることを願いますが、成果発表会をオンラインでも中継するなどハイブリッドな運用をしたらどうかと考えています。

最後になりましたが、あらためまして、本事業にご協力いただいている御影高校の先生方、中でも特色教育推進部長の橋本淳史先生（国文学専修の卒業生）、そしてお忙しいなか成果発表会にご参加くださった皆様に感謝申し上げます。



2019年成果発表会の様子



2021年成果発表会の様子

### 65歳なんてつまらない……

松田 浩則

退職してからよく聴くようになった Amazon Music から、アズナールの甘い歌声が聞こえてきた。「昨日までぼくはまだ 20 歳だった」(Hier encore, j'avais vingt ans)。文法的には単純だけれど、こんな洒落た言い方はなかなか口をついて出てこないなあと改めて感心しながらさらに聴いていると、「馬鹿なことばかりで時間を浪費し……、残ったものといえば額の皺と倦怠の怖ればかり」と嘆いたあとで、最後は、「今、どこ？ ぼくの 20 歳は？」と高らかに歌い上げた。これを聴いて、せっかく淹れた朝のコーヒーが一気にまじくなった。どう鼻目に見たって、結末が陳腐だし、フランソワ・ヴィヨンの「去年の雪、今いずこ」のパクリじゃないかなどと毒づきつつ、そんなに 20 歳がいいのかい、と突っ込みたくなる。ポール・ニザンが『アデン アラビア』の冒頭で、「ぼくは 20 歳だった。それがひとの人生で一番美しい年齢などとはだれにも言わせまい」と書いているじゃないか、それに、『二十歳のエチュード』として出版される原稿を残し 19 歳で逝った原口統三も、そのパラドックスを多用した硬質の文体で若者たちが対峙する存在そのものの矛盾を鮮やかに抉り出していたじゃないか。

ささいなことで一日の出鼻をくじかれたと思いながら、サルトルの『出口なし』を久しぶりに読み直していたら、以前気づけなかったイネスの科白に目が留まった。「人間の死ぬのはいつも早すぎるか — 遅すぎるかよ。でも、一生は、ちゃんとけりがついてそこにあるの。一本、線が引かれたからには総決算をしなけりゃ。あんたは、あんたの一生以外のなにものでもないんだから。」サルトルにしては妙に説教臭いと感じつつ、もし 65 歳の定年退職がイネスの言う一本の線にあたるというのなら、たしかに私も人生の「総決算」をしなければならない時期を迎え

ているのだろうと素直に納得する。文字通りの自転車操業でこれまでの 65 年をしのいできた私でも、人並みに親を送り、自分の墓を準備し、世にいう断捨離もほぼ終えた。準備は万端！ けれど、それでも私の人生のバランスシートは負債だらけで終わるに違いない。これまで「総決算」がどうなるかを気にかけて生きたことなど一瞬たりともないのだから。でも、そもそも負債があるうとなかろうと、65 歳なんてつまらない、どう考えても悲惨すぎる。という、今さらもう一度、20 歳を生きたいとも思わない。お腹の突き出た中年男、あるいはメタボの老年男の方が 20 歳の青年よりずっと居心地のいい生き方ができるって、ロラン・バルトがどこかで書いていなかっただろうか。あわれな年金額に目をつぶりさえすれば、ストレスの少ない日々をのんびりと送れるのだろうか。と、ここまで書いて、気になったのでバルトの生没年を調べてみたら、なんとバルトは 64 歳で逝っているではないか。『テキストの快楽』の著者は、65 歳は快楽の終焉の年と察知して、さっさとこの世におさらばしたのだろうか。なんともはや。しかたない、先見の明もなく、65 歳まで生き延びてしまった凡人の私にできることは、身の丈にあった「快楽」を紡いでいくことくらいだろう。そしてそれはイマジネールの世界で遊ぶことしか考えられない、これまでそこにしか喜びを感じたことはないのだから。でも、それもいつまで続くやら。さしあたり、私の耳にささやいてくるのは、ヴァレリーが「海辺の墓地」の冒頭で引用したピンダロスの「わが魂よ、不死を求めず、/ きみの限界を汲み尽くせ」(「ピュティア祝勝歌 III」、中井久夫訳) だろうか。もちろん私にそんな悲壮な想いがあるわけではないけれど、それに少しだけ近いところに私の 65 歳の自画像 (status quo) があるのかもしれない。

### 編集後記

2021 年も新型コロナウイルス (COVID-19) の流行が終わらず、神戸大学の教育・研究に影響を与えつづけています。昨年度に引き続き、ほとんどのイベントが中止かオンラインでの開催となり、キャンパスは相変わらず閑散としています。とはいえ、ワクチン接種が全国的に進み、神戸大学でも職域接種が始まるなど、希望が見えないわけではありません。今年度も第 1、2Q の授業の多くはオンラインで行われていますが、教育効果の観点から、いくつかの演習は感染対策を講じたうえで対面にて実施されています。対面での演習で議論を楽しむ学生たちの様子を見てみると、豊かなキャンパスライフが早く戻ってくることを願わずにはいられません。

私自身も 2020 年度の春から神戸大学に着任したので、神戸大学文学部の「いつもの」日々を体験したことがありません。文学部の裏手にある満開の桜を窓から一人で眺めていると、少し物悲しい気分になりました。学生はもっとでしょう。来年こそ、桜の下で春の訪れと日常の回復を祝ってお酒を酌み交わしたいものです。(新川)



対面での演習の様子